

国希望者二百六十人現地を離れることに決まりましたから二十一日方正を離れますとの連絡があり、通河での宿泊準備をお願いする。通河県でも各部落からの婦女子六十人中には、長野県から終戦まぎわ十余人勤労奉仕隊の娘さん達と一般人五十人通河に集まりましたので日本に引揚げが決まったことを伝えると泣いてよるこぶものも数多くおりましたが、中には日本内地の不安を感じて帰りたくないという人もおりました。また子供が満人宅にいとまった人もおり、全員救出困難をきわめましたので、帰りたいと言う人達二百余人で現地を離れることに決定、司令部に報告船の借上げを依頼、一路ハルビンに向かって出発、途中木蘭港より三十余人是非とたのまれ同船して参りました。ハルビン港にはハルビン日本居留民会から四、五人の係員の出迎えを受けそれぞれ難民収容所に案内を頂きました。

七月始め頃から引揚げが始まり、日本本土めざして皆さんに帰っていただきました。

一般孤児については救出することかできなく残念ではありませんでした。私と八木さんは八路軍司令部から帰ら

ないで日本人救出に働いてくれと言われましたが、最終列車で逃げるようにハルビンを後にしました。

他人の子を連れ帰る、悪戦苦闘

岩手県 藤川 タマオ

私の夫は昭和二十年八月一日に、満州の現地で応召、第二六〇〇部隊にはいりました。八月九日ソ連軍の満州侵攻がはじまりました。八か月の子を背に、三歳の長女をつれ、私達の会社の家族全員が避難、新京駅前の鉄道省の玄関で二日二晩の不安な日を過ごしました。八月十五日十二時、終戦の放送が流されました。加えて、ロシア兵が南下しているということも伝えられました。私たちは南下する列車に乗ることになり、そのために、二、三日駅の改札口に並びました。手には持てるだけの食べ物、カンパン、いり米、かん詰などを大ぶろしきにいれました。下着類も入れました。順番を待ちに待って、さて、いよいよ乗ることになり、新京駅の改札口から、何

千人もの人がわれ先にと、どーと後からおされましたが、三歳の長女の手をはなしたらいへんですので、手がちぎれるようになりながら半日がかりでようやく乗ることができたのは、屋根のない貨車でした。

これからどこへつれて行かれるんだろうと不安でしたが、いいや、死ぬときはみんなといっしょだ、と自分にいいせました。駅の周辺は人、ひと、人で泣き叫ぶ声、どなる声——人のことなどかまっていられません。

一週間ぐらいかかって着いた所は北朝鮮の三十八度国境線の近くです。そこで二か月ぐらい。豆のご飯は一日二回、さつと一杯です。避難民ですからまた次の所へと、三、四日歩いてまた次の所へと、四、五回くりかえしました。そのうち、食べ物はこうりゃんおかゆ、湯呑みで午前十時、午後四時です。そのこうりゃんのおかゆもだんだん量がへり、栄養失調でつきつきと死んでいく人が出てきました。死んだ人は、米の入ったカマスをひろげ、三枚にくるみ、日本人墓に埋葬しました。なんという場所かわかりません。いっしょに避難した植村八重子さんもチフスで亡くなりました。残された三歳の男の子

をたのまれました。背中の子ども、三歳の長男、植村さんの子どもと、言語につくせないつらさの中でぶじ連れ帰ることができました。今、四十七歳で幸福に暮らしています。

終戦のよく年、二十一年六月、三十八度線を越えて南朝鮮に行く列車は一本も通っていませんでした。歩く以外に方法はありません。この三十八度線を、三人の子どもを連れ十一日がかりで歩きました。最後の四日摩は、かん詰めのかんで腹がへっては水を飲み飲み歩きました。子どもは歩きたくないと泣きたすし、手を引く私はへとへととなり、少しづつみんなの列からはぐれがちになりましたが、こうしてはいられない、死んでならないと、自分に言い聞かせ必死になって追いかけてました。三十数か所の大小の川も渡りました。三百七十人もの中には流されて死んで行った老人がいく人かいました。そんな中で、親日派の朝鮮の方々、十人ほどいて、子どもは肩車にのせて渡してくれました。

悪戦苦闘ののち、遂に国境の三十八度線を渡り着いた所は南朝鮮でした。そこから三日ほど汽車にのり、また、

何日か歩いて着いた所は引揚げ船に乗るテントのある港でした。そこで、麦だけの御飯をもらい食べることができました。そのおいしかったことは未だに忘れません。

博多港沖についたら、船内にコレラの患者がいるというので、船に乗ったまま二十一日間も上陸できませんでした。検疫を受けてようやく祖国の上をふむことができた喜びもつかの間、連れてきた三歳の子どもが、はしかになり博多国立病院に二週間入院。

私の母に迎えられて大船渡線の汽車に乗ったとき、これで、ぶじ生きて帰れたんだなあーとしみじみ思い、力の抜けていく感じが四十数年たった今でも、この間のできごとのように思えてなりません。

今、わたしは背中に背負いくぐり抜けた四十三歳の息子、嫁、孫たちに囲まれて、ほんとうの平和の時代をかみしめています。

残留し、病弱者の輸送に

福島県 藤田 昭一

陸軍省の文官であった父が、満州の司令部へ転任するにあたり、満州を墳墓の地とすべく家族同行し、昭和十一年春からハルビン市に居住していた。私は昭和二十年春から、六百キロ南下した遼陽の関東軍部隊に学徒動員で入隊中であつたので、終戦時は進駐してきたソ連軍に無条件降伏、武装解除となつた。

将校はシベリアへ連行され、兵および学徒はその場に収容され、粟粥と乾パンの抑留生活が始まつた。その間、学徒たち数度にわたる収容所脱走をはかり、三々五々収容所を抜け出し、それぞれ親もとへとたずね歩いた。

その後、おたがいめぐりあうことはなかつた。私は十二月に収容所を出たのち北上し、ハルビン市の家族をたずね、収容先の家族とぶじ合流することができた。戦後は、家族一人ひとりが食するために稼いだ。土木作業や